

～特集～ 平川市に生きた 大川亮_氏とこぎん刺し

皆さんは、大光寺に生まれた「大川亮」という人をご存じですか。広報担当の私は、実のところ数年前まで知りませんでした。大川さんは、皆さんの身近にある「こぎん刺し」の美しさにいち早く気づき、広めた人なのです。現在のこぎんが製品として身近にある過程には、どのような背景があったのでしょうか。今回は、「大川亮さんとこぎん刺し」に焦点を当てて紹介し、現在までのつながりを追ってみたいと思います。

こぎん刺しとは

江戸時代に津軽地方の農村から始まった伝統的な刺し子（手刺繍）の技法です。江戸時代、津軽の農家は木綿を着ることを禁じられ、麻で着物を作っていました。津軽の厳しく長い冬を少しでも快適に過ごせるよう、麻布の粗い織り目を麻糸（または木綿糸）で刺し固めることで布地を補強し、防寒性を高めました。こぎん刺しは平川市を含めた津軽を中心に発展しました。



こぎん刺し



大川亮の生涯



大川さんは、大光寺の豪農に生まれました。当時の大光寺村村会議員を務め、弘南鉄道の敷設や農業の普及開発にも携わるなど、平川市を含めた郷土の工芸・農業・殖産に大きく貢献しました。

また、農家の野良着であったこぎんの緻密な美しさに惹かれ、生活の中から消えつつあったこぎん保存のため、明治末期から収集活動を行いました。1915年には、大凶作に苦しむ農家の

人たちに副業を作ろうと、私費を投じて「農閑工芸研究所」を設立。制作指導をしてこぎん刺しの製品開発・販売に取り組みました。また、親交のあった民芸の先生たちにこぎんを紹介し、東京の百貨店では様々なこぎん製品が販売されました。東京でこぎん刺しが好評になり、1925年頃からの民芸運動をきっかけにして、こぎん刺しは全国的に有名になりました。



全国的な民芸運動でこぎんが広まる前に、いち早くこぎんの魅力に気づいていたのがすごい！

大川亮（1881～1958）

1881年 大光寺村に生まれる

- ・幼少の頃に父と死別し、おじの三浦顕意（弘前市藤代）の後見で育つ
- ・東京駒場の農業実科や東京美術学校で学ぶ

1903年 青森に戻る

- ・青森御料林局（現東北森林管理局）に勤める
- ・軍隊に1年入隊

1907年 大光寺村村会議員当選
（以後4期連続当選）

1913年 大凶作の際、集落ごとに農事実行組合を結成させる

- ・稲作の普及改良に努める

1915年 農閑工芸研究所創設

1927年頃 弘南鉄道敷設に関わる

1932年 木村産業研究所の嘱託となる

1958年 77歳で逝去

大川亮さんのお孫さん

農閑工芸記念館 大川 けい子 さん

祖父の亮さんとは 10 歳まで一緒に生活していました。現在は、生家である農閑工芸記念館（大光寺：P5 参照）で亮さんが収集したこぎん製品を展示しています。幼い頃の思い出や亮さんの取組についてお聞きました。

—— 亮さんと過ごした思い出はありますか。

幼稚園の時は祖父が送り迎えしてくれていました。そして幼稚園の時から小学校 5 年生まで、家に帰るとほぼ毎晩、祖父の部屋でお絵描きをしていました。祖父は当初画家を目指していたこともあり、近所の子どもたちが遊びに来たらユリの花瓶を持ってきて競わせて描かせるなど、絵を教えてくれたことは覚えていますが、こぎん刺しについては聞いた記憶がないんです。



家族と過ごす亮さん（右上）

—— 亮さんの平川市での取組はどのようなものだったのでしょうか。

農家の人がこぎんを売りたいと訪ねてくれば買い取るという方法で集めたようですが、それで家計が大変だったと聞いています。1915 年、最初は敷地内に作業場を作りました。村の人々を集め、農閑期の副業としてこぎんも含め様々な工芸品の制作指導をしたようです。集まる人が増えると、道路を挟んで家の向かい側にも 2 階建ての作業場を作り活動を広げました。当時は男性が刺し手だったと聞いています。祖父はこぎん

敷地内に作られた作業場



を財布やバッグに取り入れるなど多彩なアイデアで製品を考案しました。

—— 亮さんはどのような思いでこぎん活動に取り組んでいたのでしょうか。

東京で学び、兵役を終えて故郷に戻った祖父にとって、炉端でこぎんを刺したり、編み仕事をしている情景は新鮮な喜びにあふれているように見えたのではないのでしょうか。近所の若い人たちに精神的な心の支えとして手仕事をすることを奨励していたようです。祖父の場合は絵を描くことで励まされたのと同じように、大光寺の若い人たちにもそのような支えを与えたかったのではないのでしょうか。

—— 亮さんがつなげてくれた「こぎん刺し」。次の世代への思いを聞かせてください。

こぎんに関心がある人に、祖父が推めた古いこぎんや大正時代にデザインしたこぎん製品をぜひ見てもらいたいです。そのために、できる限り展示品を見せる機会を作っていきたい。そして作品から感じ取れるものをそれぞれ受け取って、こぎんの新しい道をつくってもらいたいと思います。

また、この家に保管している作品と似たようなものが地域の皆さんのお家にも眠っている可能性もあると思っています。この記事を見て「似たようなものが私の家にもある！」と昔の作品とその背景に思いを馳せてくれる方がいたら嬉しいです。

裏面には
革製のハンドル！



鏡付き



長財布



ベスト

亮さんが着用しました！



▲亮さんが考案したこぎん製品

展覧会「大川亮コレクションー生命を打込む表現」を企画

青森公立大学 国際芸術センター青森 (ACAC)

主任学芸員 慶野 結香 さん

国際芸術センター青森で 2021 ～ 2022 年に大川亮さんの展示を企画した慶野さん。展覧会に至った経緯や亮さんとこぎんの関わりについてお聞きしました。

展覧会の様子 ▶



—— 展覧会について、なぜ企画しようと思ったのでしょうか。

展覧会調査の際、お孫さんである大川けい子さんに詳しくお話を伺い、亮さんの遺品や農閑工芸の数々を見させていただき、綺麗に保管されていたこぎんの身頃（体の前と後ろを覆う布）や製品に驚きました。伝統的な技術を使って製品を作ることは現代でも行われていますが、100 年以上前に現代よりもセンスがいいものが作られていたことをもっと知ってもらいたいと思いました。

「身頃」とはこの布！



—— 亮さんが現在のこぎん刺し文化に与えた影響についてどう思われますか。

亮さんは、こぎん刺しのデザインを製品としてどのように生かせるかを相当考えていて、様々なアイデアがあったと思います。亮さんは、ベストや財布、バッグなど当時の都市生活の中でもかなりおしゃれに見える商品を、こぎんを用いてプロデュースしていました。

東京美術学校で学び、様々な文化人と交流して磨いた審美眼で、こぎんは素晴らしいデザインなのだとことを訴え、それが現在の文化にも影響していると思います。こぎんが着られなくなっても製品が流行れば伝統技術も伝わっていく、という意図もあったのではないのでしょうか。

—— 平川市という地域が亮さんのこぎん刺し活動に与えた影響についてどう思われますか。

大川家は光光寺の地主さんで、当時は飢饉や不作の年もまだ多かったと思いますし、農家の暮らしがどうしたら良くなるのかを考えていたと思います。農閑工芸として、こぎんなど農家の方々が生み出した文化を認め、その伝統的な技術を用いて製品を作れるようにプロデュースしたことが重要だと思います。

亮さんのこぎんの身頃のコレクションには、柄を分類した形跡が残っていました。名前の付けられたこぎんの多くは、田んぼに由来する柄でした。地域の田園風景は、原風景のようなものとして確実に亮さんに影響を与えていたと思います。



—— 慶野さんが考える亮さんのすごさを教えてください。

1915 年に設立した農閑工芸研究所は、地域の技術保持者と一緒に試作や製作に励むなど、ワークショップ（工房）的な場所だったようです。伝統的にはこぎんは女性から男性をはじめとする家族へ贈ったものです。元来のギフトカルチャーを残すような形で、こぎんなども大切な宝物を作ることを目指していた気がしてなりません。昭和時代にはホームスパン（羊毛の手織物）や弘前手織の研究もかなりしていたと思いますし、地域の人々がつくるものへの敬意と限りない興味に驚かされます。

こぎん文化を守り続けて 83 年

弘前こぎん研究所 取締役会長 成田 貞治 さん

弘前こぎん研究所でこぎん文化を守り
続けている成田会長。伝統技術を守って
いくうえで大切なこととお聞きしました。



—— 亮さんの取組についてどう思われますか。

亮さんの「工芸品は商売にしよう」という考えは、私
と同じ考えです。そうしないとどこかで消えてしまう
という感覚があったのだと思いますよ。当時は資料として
持っておく人は多かったけれど、形にして残そうという
のは亮さんが初めてだと思います。それに基づいて弘前
こぎん研究所ができたわけではないけれど、考え方とし
ては影響はあったかもしれません。

▼カード小銭入れの図案と麻布と綿糸



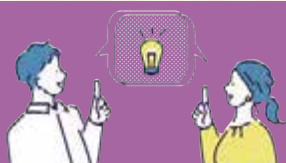
▲麻布（こぎんを刺す布）を折る職人さん

—— 伝統技術を守り続けるためにはどのよう な必要がありますか。

商売で維持するという言葉に尽きると思います。私
たちの会社は今年で 83 年目。

先代たちからは「一人の人間の人格はせいぜい 100
年で終わりだが法人格を持てば何百年も続くから大事
にしろ」と言われてきました。私の仕事は、昔か
ら先代たちが築いてきた会社やその手法を受け継いで
繋げることです。今までには連鎖倒産による経営の危
機もありましたが、なんとか踏みとどまってきました。
これからも「こぎん刺し」文化を守るため、今後はイ
ンテリア的なものとコラボするなど、生き残る道を探
り続けていきます。

図案をもとに職人さんたちが自宅での
「内職」作業で模様を完成させます



大川亮さんのこぎんにふれてみませんか？

◆農閑工芸記念館（仮設）

大光寺一滝本 105 ☎44-3429

亮さんが収集したこぎんなどの工芸品
を約 100 点保存。実物を見学できます。

●入館料 500 円

●時 間 10:00 ～ 16:00

※見学は事前にお問い合わせください。



◆郷土資料館（文化センター内）

☎44-1221

亮さんやこぎんについての展示が
あります。

●時間 9:00～17:00（火～土）



現在に受け継がれる こぎん刺しの取組



松崎小学校卒業制作

松崎小学校では、郷土に伝わる文化への理解を深めるため、平成18年度以前から6年生の卒業制作としてこぎん刺し学習を実施しています。

当初からこぎん講師を務める大高眞知子さんは、「限られた時間の中で作品を完成させる必要がありますが、みなさん頑張って完成させてくれます。刺激になって私も楽しく教えています。」と話します。練習で作るこぎんコースターは小学校の玄関に展示されています。



▲玄関のこぎん展示



▶学習の様子



「ひらかわの寺子屋」でこぎん体験

ひらかわの寺子屋は、生涯学習として一般教養・専門知識を学べる市のイベントです。平成21年から継続しており、令和6年度にはこぎん刺し講座を実施しました。参加者たちは、こぎんの歴史や基礎を学び、オリジナルのコースター作りに挑戦しました。初めての方も徐々にコツをつかみ、素敵な作品に仕上げていました！



金田小学校こぎん刺しクラブ

金田小学校では、児童が数あるクラブの中から興味のあるものに入り活動するクラブ時間があります。その一つとして、令和6年度からこぎん刺しクラブが開設されました。

担当の七戸紅春先生は、「私自身も中学校の家庭科の授業でこぎんを習い、その後も趣味でこぎんを刺していました。模様ができていく楽しさを感じてくれたら。」と話します。児童の中には、クラブ活動でこぎんを体験し、家でも取り組むようになった人もいます。



▲こぎん刺しクラブの活動の様子

こぎん刺しクラブインタビュー



6年生 山口 千羽耶さん
こぎん刺しは4年生から始めました。集中して作品を作れるのが好きです。自分が作った模様でポーチやティッシュケースを作りたいです！



4年生 三上 由愛さん
こぎん刺しはクラブで初めてやりました。オリジナルの模様を作るのが楽しいです。今後は可愛い花柄に挑戦してみたいです！

祭に生きるこぎん刺し

八幡崎地区では、疫病退散を目的とした「疫の神退散祭」^{ぼうのかみ}が2年に一度、7月に行われており、この祭りでの「荒馬役」がこぎんの着物を使用しています。青森県史によると、こぎん着物を着用するようになった時期は不明ですが、祭保存会が町の所蔵者から集めた14点のこぎん着物を毎年着用してきたのだといいます。ただ、現在は傷みが出てきたため、古い元のこぎんはそれぞれが保存し、故・川村芳枝さん（青森県出身の刺し子作家）が復元したこぎんを着用しているようです。

様々な種類のこぎん着物



とても古そうな着物！

▶こぎんの着物を着た荒馬役



▲疫の神退散祭の様子



こぎん刺しを趣味とする市民の方々



津軽刺しこぎん作家
田中 敏昭さん（柏木町）

「こぎんは黙々と作業することで無になれる。模様が出来ていくのが楽しい。」という田中さんは、こぎんに熱中して半世紀。始めるきっかけは、奥様が刺しているのを見て興味を持ったことだそう。自身が東通村に単身赴任した際、仕事終わりにお酒が飲めなかった田中さんは、こぎんを刺していました。今では大きい作品は集大成を迎えましたが、毎日少しずつ手を動かしています。



▲「物見崎の朝」 1年半で完成させた作品



佐藤 美子さん（尾上）

佐藤さんは、高校時代に趣味でこぎんを刺していました。それから長年刺していませんでしたが、お子さんたちが子育ての手を離れたことをきっかけに、再びこぎんを開始。「昔よりもカラフルな糸が増えて嬉しくて！」と楽しそうに話す佐藤さん。自分用にはもちろん、旦那さんにはコインケース、娘さんにはトートバッグ、東京にいる息子さんには彼の趣味の着物に合うバッグなど、ご家族のことも思ってこぎんグッズを作っています。



～編集後記～

今回、大川亮さんとこぎんの関わりについて取材させていただき、その活動や背景を改めて知ることができました。亮さんがつないでくれたこぎん文化は、平川市内でも様々な取組として続いています。地元平川市の魅力の一つとして、亮さんの活動を多くの方に知っていただけたら嬉しいです。こぎん文化を今後も大切にしていきたいと思います。